

民主教育の進展に地域が果たすこと

―「栗山の教育を語る会」の活動から

泉 真 沙 子

◇ 前身団体の発足、活動の推移

「栗山の教育を語る会」が、今年二〇一四年で結成から三九年目を迎えるにあたり、先人たちの足跡を紹介いたします。

一九七五年、高度経済成長の波に乗り、労働者は企業戦士として働き続け、経済も教育も様々な問題を抱える状況にありながら、社会は急速に動き出しました。

このような社会情勢のなか、「民主教育をすすめる道民連合」（以下「道民連合」）の呼びかけで、当会は発足しました。

発足当初の名称は「民主教育を守る栗山住民会議」でしたが、もう一つ印象が弱いということで、「民主教育を進める栗山住民会議」（以下「栗山住民会議」）という名称に替えました。発足時の役員体制は、栗山地区労と北海道教職員組合（以下「北教組」）が母体となつて、町民や他団体との協力のもとに構成されました。

以来、栗山住民会議は、住民と共に、民主教育の拡充をめざす活動を地域で継続していくことになりました。主な活動の一つは集会の開催で、毎年工夫を凝らし、多種多様なテーマで講演会や分科会の形式も取り入れました。

一九八五年〜九〇年代初頭、バブル全盛期から崩壊へと進むなか、子どもたちの生活環境にも大きな変化が開始、いじめ、不登校、自殺などが社会問題になりました。こうしたなか、栗山住民会議は、「地域のための教育」を願って、住民に働きかける工夫をしました。すなわち、子どもたちの生活の基盤は安定した家庭環境にあると捉え、その上で、住民の動きやすい職場の条件整備に取り組んだのです。その一方で、住民とのつながりを深めるために、「キノコ食・毒の見分け方」や「地球環境問題」の講演会を開いたりもしました。身近な話だけに楽しい集会になりました。（以上、北教組主催の合同教育研究全道集会レポートより一部抜粋。）

◇ 「栗山の教育を語る会」誕生の背景と理念

一九九〇年代に入ると、長引く不況の影響で就職難・リストラなどが社会問題となり、子どもたちをめぐっては「キレる」という言葉の広がりとともに、少年犯罪の問題が深刻化していきました。世界では、戦争、紛争、テロにより、毎日のように多くの人々が命を落とすなか、日本の自衛隊の海外派遣も強行されました。

このような社会情勢をふまえ、栗山住民会議では、あらためて、教育問題、環境問題、平和問題などを中心テーマに据え、活動を進めてきました。しかし、この時期、栗山住民会議の母体であった地区労が解散し、平和運動センターへの移行という過渡期を迎えたことが影響し、住民会議の活動も停滞の局面に進んでいきました。

そして、一九九〇年代後半期に入ると、経済界の教育への執拗な介入や利益追求に走る動きは、社会情勢を急激に変化させました。

これを受け、栗山住民会議では、自らの活動を町民の皆さんによりいっそう深く理解していただきたいと、一九九九年六月の総会で、団体の名称を「栗山の教育を語る会」（以下「語る会」）に改めることを決めました。活動母体が次々と解散・縮小していくなかで、小さくとも地道な活動を続けていくという決意のスタートでした。

活動の柱としては、「子どもたちが主人公である教育を目指す」、「子どもたちの人権を守る」、「子どもたちの生命を守る」、「教職員との強い連帯」、「地域住民に広げる役割」と立てました。

◇ 会の運営の現状

「語る会」の運営や行事の内容などは、年に六〜七回、役員会を開いて議論し、決めていきます。

役員の人選については、北教組栗山支会の執行委員が事務局長の任に当たるとは、保護者の方を四校区から一人ずつ人選しています。保護者の人選は毎回相当に難儀しており、すぐには決まりませんが、無理を承知で引き受けてもらっています。

スタートに若干バラツキがあっても、いったん動き出せば皆一丸となり、保護者の皆さんも精一杯の働きをしてくださっています。ただ、「語る会」に関わる期間はそれぞれに限られており、事務局長は一年で完全交代、四名の保護者役員も、それぞれの事情で無理はできませんので、一〜二年で交代です。会がどのようなものなのか解り始めた頃に交代になるので、非常に残念なことです。時折、会の行事のパンフや案内などを役員のお宅に直接届けますが、これは役員間の意思疎通を欠かさないようにしたいと考えているからです。

会のスムーズな運営には、町行政や町教委への対応が必要になることがあります。問題によっては体当たりも必要ですが、小さな町ゆえの人間関

係のしがらみも避けられません。時にはケース・バイケースで動かざるを得ないこともあります。最も頼りになるのは教職員ですが、その勤務状況の厳しさから来る身分上の制約もあって、そのために焦れたい気持ちになる場合もありますが、その都度厳しさを何とか乗り越えているというのが現状です。

それでも、道民連合主催の集会や、北教組支部・支会等の主催する要請行動には積極的に参加し、交流を深めています。また、栗山町政懇談会や議会報告会にも参加し、「語る会」の問題意識と重なる事柄について考えを述べ、他の参加者に理解を求める努力をしています。

あわせて、「語る会」の存在を地域住民の皆さんに伝える手段として、年一回のペースで、教育シンポジウムを開催しています。これまでに、民主教育推進の根幹となる「教育」、「平和」、「人権」の各分野の問題を、一分野三年間、計九年間にわたり、じっくりと取り組んできました。「平和」に関しては、「大切な一日」という紙芝居をつくり、平和教育の教材に活用してもらっています。このほかにも様々テーマを選んで活動を続けています。シンポジウムの開催にあたっては、三〇枚ほどのポスターをつくって町の公共施設やスーパーなどに掲示したり、町の広報誌や新聞社等に周知を依頼し、参加者の拡大を図っています。当日は、現役の教職員のほか、すでに退職された教職員OB・OG、近隣の町の「語る会」の関係者の皆さんに応援をいただいで開催しています。地域住民の皆さんが、主体的に参加していただけるように工夫するのが、私たち「語る会」の最大の役割と理解しています。

近年、特定秘密保護法の制定、集団的自衛権行使の容認論や武器輸出禁止三原則の緩和論の進展、立憲主義の否定、原発の再稼働・海外輸出の問題など、戦後日本の骨格を揺るがす社会の急変が、国民の生命と暮らしに大きな影を落としています。「戦争への道」を歩み始めてもいます。

こうしたなか、地域において「語る会」の果たす役割はますます重く明確になっていきます。これからも、保護者、地域住民、教職員、隣り町の「教育を語る会」の関係者の皆さんの理解と協力を得ながら、活動を続けていきたいと思えます。わが子や教え子を再び戦場に送らないためにも。

泉真沙子（いずみ まさこ）

教職員を退職して一七年。小さな町でスポーツや自然活動を日々楽しむ一方で、一九九九年から「栗山の教育を語る会」に参加し、現在は会の代表を務める。いくつになっても、未来を見つめて生きていきたいと考えている。